資料２

平成29年度　佐賀県立高志館高等学校　学校評価結果

1　学校教育目標	2　本年度の重点目標
校訓「高志濯心」の理念を指針として訓育に努める。 **「ステップアップ高志館」－更なる成長を目指す－** ① 学業の充実 ② 基本的生活習慣の確立 ③ 生徒会活動・農業クラブ活動・部活動・ボランティア活動の活性化 ④ 信頼される開かれた学校の推進 ⑤ 専門教科の教育内容及び施設・設備の充実	○生徒が自らの可能性を信じ、更なる「成長」を目指せるよう、授業と部活動の充実に努め、生徒が力を試すアウトプットの場を多く準備する。 ○生徒一人ひとりが「自立心を育み夢の実現へ」邁進できるよう、生徒の「成長」を信じて 可能性を引き出す支援を実践する。 ○時代とともに技術は変化するが、身につけた精神は生き方を支えることを理解させ、変化の激しい時代を生き抜くための人間力を身につけさせる。 ○先が見えない時代にあっては、常に考え・課題を解決する能力が備わっていることが必要であるとの認識を持ち、何をすべきかを考え、自らに与えられた課題や責任を果たすことで自信を持ち、自立しようとする気持ちを育む。 ① 危機管理意識の向上と徹底、生徒指導の充実 ② 学科プロジェクトの推進 ・園芸科学科 ・・・ 環境保全型農業プロジェクト ・環境緑地科 ・・・ スクールパーク化プロジェクト ・食品流通科 ・・・ 学校ブランド商品の開発プロジェクト ③ 学力向上 ④ 希望進路実現100%の達成 ⑤ 生徒会活動や農業クラブ活動、部活動やボランティア活動の活性化

達成度
A：ほぼ達成できた
B：概ね達成できた
C：やや不十分である
D：不十分である

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む

3　目標・評価

①　危機管理意識の向上と徹底、生徒指導の充実

領域	評価項目	評価の観点（具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題（左記の理由）	具体的な改善策・向上策
学校運営	○危機管理意識向上と安全対策	安全管理の意識をもって生徒指導に当たっているか。 現場に即した緊急マニュアルを策定しているか。	・事件、事故の未然防止や緊急時の報告、連絡の徹底 ・危機管理マニュアルを毎年見直す	・現状に即した危機管理マニュアルの改訂と伝達講習会の実施。 ・農薬の取り扱いに関する研修会の導入。 ・避難経路の確認 ・不審者対策	B	・「農薬の管理取扱い」について職員研修を実施し、校内規定を作成したことで、残農薬の保管管理が徹底でき、年度内に適切な処分ができた。 ・第3避難所としての初期対応を危機管理マニュアルに新たに加えることができた。	・今後、毒物劇物の管理について研修会を実施し、特定の薬物について職員の意識向上を図り、GAPに対応した農場管理を心掛け、生徒学習の教材とする。 ・Jアラート等に対する危機管理マニュアルの作成を検討する。
教育活動	○危機管理意識向上（生徒指導）	校則や交通ルールを守れたか。危機管理意識を持てたか。	・部活動、実習等における事故防止の徹底 ・交通安全と自転車マナーの向上 ・防災意識の向上 ・防犯意識の向上	・各教科担当者における事故防止指導を実施。 ・学期に1回自転車点検を実施。 ・年間を通して計画的に各種講話を実施する。	B	・校則は全般的に守れた。交通講話、防犯講話、自転車点検や部活動・実習における事故防止指導を行い、危機管理意識の向上は見られた。しかし、事故が十数件発生しており、全体的に多く、さらに危機管理意識を高める必要がある。 ・最寄りの警察署や地域と連携し事故防止の注意喚起ができた。	・今後も継続的に取り組みを実施し、危機管理意識の向上を目指す。その中でも、年度途中より、生徒会による自転車盗難防止の取り組みが行われ、施錠や駐輪状態が良くなってきている。生徒自らが率先して考え行動し、危機管理意識向上のための取り組みが大事になってくる。
教育活動	●健康・体つくり	基本的生活習慣を身につけさせることができたか。	・感染症予防の徹底 ・命の教育と性教育の充実 ・正しい食生活と健康管理指導の実施	・アンケートによる実態調査や食育講演会、家庭科の授業等で、食に対する意識を向上させ、啓発を行う。 ・糖分の多い飲料や炭酸飲料を控え、水、お茶、熱中症対策飲料等で水分を摂取をするよう促し、日常の生活習慣から変えていくように意識付けさせる。 ・エイズ講演会や性教育講演会を1回以上開催し、自己管理の大切さを学ばせる。次世代を担う人材であることの自覚を持たせる。 ・保健便りで、その時々の保健の関する重要事項を生徒や保護者へ伝達し、啓発を図る。	B	・保健部として、本年度初の試みとして食育講演会を実施。これまで家庭科の授業で行っている内容と重なるが、外部講師という形で話を聴く機会を設けることで、より事の重要性を意識することができた。 ・清涼飲料水の摂取、食事の内容の改善等については、教育振興会総会で保護者に話をさせていただいた。 ・エイズ講演、性教育講演会は例年通り実施。家庭科教育も重ねて行うことで、次世代を担う人材であるという意識の芽生えを感じた。	・食べることの積み重ねが体を作ること、生きることへとつながっているという意識を持たせ、継続的に行動にうつさせたい。 ・清涼飲料水の摂取・食事の内容の改善がどの程度できているか確認していきたい。 ・エイズ、性教育等の講演を継続的に聴かせることで啓発を図っていきたい。 ・自らの行動に責任を持ち、生活的自立、精神的自立、性的自立を実現しようという気持ちを育成していきたい。 ・講演形式のものに加えて、生徒自身が実践しやすい内容を取り入れてけたらと思う。

②　学科プロジェクトの推進

領域	評価項目	評価の観点（具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題（左記の理由）	具体的な改善策・向上策
教育活動	学科プロジェクトは推進したか。	・生徒・教員がともに課題研究やプロジェクト学習に取り組み、生徒自らがPDCA（計画→実行→評価→改善）を実践できる能力を養う。	・各学科で1つ以上の研究テーマを掲げ取り組む。 ・生徒主体の研究活動の推進。	・農家や地域の身近な課題に目を向けた研究に取組む。 ・プロジェクト学習に各学科職員全員が取り組む。 ・研究内容を客観的に評価するため、すべての研究成果について発表の場を設ける。 ・県連大会や各種コンテストに出場し、入賞を目指す。	C	・課題研究においては、生徒主体の研究活動が実施でき、多様な観点から研究に取り組んだ。プロジェクト活動については、一部のチームのみの活動になっている。 ・校内研修はもとより外部のICT研修へ参加しスキルアップに努めた職員が増加した。	・今年度、校内発表会を新たな形で実施することができたことで、次年度からの発表会形式を検討する。農ク県連大会のプロジェクト部門では、入賞することができなかったため、取り組む目標を明確に年間計画から練り直す必要がある。
	魅力ある専門教育を実施したか。	・生徒が自ら学べる実験実習等を導入する。また興味関心を85%以上にする。	・専門教科に興味を持つことで地域の問題に目を向けることができる。	・専門性を高めるため、各種専門分野から外部指導者を召喚し、直にプロの知識や技術に触れることで、生徒の興味関心を高めるとともに、実験・実習の充実をはかる。 ・学科間を超えた実験、実習及び縦糸学習など学科、学年を超えた魅力ある授業を展開する。	B	・生徒の専門教科への意識は、89%と興味・関心を持って取り組めた生徒がいた。縦割学習、横割学習の展開が不十分であり、学校全体から学べる要素が必要である。	・専門学習に対する興味・関心度が高い生徒の意識を更に満足度を高めるため、教職員と生徒が共に同じ時間同じ空間を共有し、楽しめる工夫された授業展開を研鑽する。
	校外・地域へ専門高校の魅力を発信できたか。	・各学科、地域を大切にした取り組みを企画し実践する。	・積極的にHP、学校だよりその他による情報発信を行う。	・3学科連携した生産物販売所の設置と模擬的な経営実践を月1回のペースで導入する。この取組みにより、専門教育の魅力を体感させるとともに、接客を通じて地域の問題に目を向けさせる。 ・HPの更新や学校だよりの発行を月1回は実施し、学校の情報を発信する。	B	・食品流通科では、流通実践学習の一環として月1回程度、校外に向けた販売会が実施できた。また、学校全体の販売会は、授業展開の流れを考慮し、1つの行事を削った。	・販売会においては、地域の方にPRができており定着していることで、今後も継続していくことが大切である。しかし、専門高校として、一般の方にもっと学校を活用してもらえる効果的な企画を考えたい。

③　学力を向上させる

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 （左記の理由）	具体的な改善策・向上策
教育活動	○教職員の資質向上	毎時間、授業を大切にする。 教育目標を明確にしながら授業に臨む。	・授業はチャイムからチャイムの真剣勝負 ・教師相互の授業研究による授業改善の推進	・公開授業を実施するとともに、校内外の授業参観や研修に1回以上参加する。 ・毎月、職員の目標を提示し、教職員の授業に対する意識を高める。	B	・先生方の研究授業の実施を促し、ほとんどの先生方に研究授業を実施してもらうことができた。 ・毎月、職員目標を提示し、職員の意識を高めることができた。	・研究授業を先生方に実施してもらったが、参観者が少なかったので、気軽に参観できるようなしくみを考える必要がある。 ・月初めに、口頭で職員に目標を具体的に提示し、更に職員の意識を高める。
	◎教育の質の向上に向けたICT利活用教育の実施	教科指導を充実させるために教材研究（作成）の充実、教員のスキル向上を図る。	・ICTを利活用した授業により、生徒の学習意欲や興味関心が高まった生徒の割合を70%以上とする。	・ICT機器を活用しやすい環境を整え、全教科において、ICTを利活用した授業を実践、研究する。ICTに関する研修会を月1回は実施し、職員の意識と技術を高める。	B	・各教科にICTを活用した、研究授業を実施してもらい、活用方法について研究することができた。 ・ICT機器を活用することで、生徒の学習意欲や興味関心が高まった。	・ICT機器（電子黒板）が、教室だけでなく、実習棟にも整備し、更に活用しやすい環境をつくる。 ・ICT機器の具体的な活用方法について、各学科、教科で話し合いを持ち、その情報を共有できるような体制をつくる。
	●学力向上	生徒の学習意欲の向上と自ら学ぶ力の養成 ・学習環境を整える。 ・基礎学力を向上させる。 ・基礎から応用へ発展的な学習に取り組む。	・学力向上プチテストの実施、資格取得の推進 ・学習の場の整理整頓 ・教科に関連したコンテスト等への応募	・時間を守る「チャイムtoチャイム」の授業実践と定着を図る。 ・学力向上プチテストを年20回、課題テストを年3回実施と学年会を中心とした事後指導の徹底と補習の充実。 ・デジタル教材Classiを活用した自主学習指導と定着を図る。	C	・学力向上プチテストでの事後指導体制について、各学年で徹底的な指導により、学習をしなくてならないという意識付けをすることができた。 ・デジタル教材Classiを活用した自主学習指導と定着について、計画的に取り組むことができなかった。	・校内学力向上委員会の実施日を年度当初に設定し、その中でプチテストの内容や実施方法を考える。 ・デジタル教材Classiを活用した自主学習指導について、各学年で活用方法を具体的に考え、まずは、活用できる体制づくりをする。学科ごとにどのような学力を定着させるかわかりやすい目標を立てる。

④　希望進路実現100%の達成

領域	評価項目	評価の観点（具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 （左記の理由）	具体的な改善策・向上策
教育活動	○進路実現	生徒の進路希望は達成できたか。	・ライフプランと進路希望の早期決定 ・心を磨く「高志館マナー検定」の実施 ・国立大学や学科関連大学への進学希望者に対する進路指導の充実	・進路講演会・ガイダンス等による進路啓発 ・マナー講座・マナー検定への積極的取り組み ・全職員による企業訪問と面接指導の実施 ・学年・学科・教科と連携した小論文・面接指導	A	・本年度も3年生全員の進路先が決定し、12年連続して希望進路決定率100%を達成することができた。 ・就職状況が好転する中で、更なる職場開拓が可能であり、積極的な生徒の進路選択が望まれる。 ・国立大学合格者を出すことができなかったが、スポーツ推薦をはじめとして、4年制大学進学者が増加した。	・来年度も引き続き、進路啓発に向けた特別活動やLHR及び3年時のマナー講座・マナー検定等を充実させ、生徒の希望進路実現のために積極的に取り組んでいく。 ・全職員による企業訪問を徹底していくとともに、面接指導等の全職員のスキルアップに努め、多様な生徒の希望に対応する。 ・大学入試の変化に対応する必要があり、早い段階からの指導体制が不可欠である。
	○キャリア教育の充実	キャリア教育の推進が図られたか。	・技を高める「資格取得」「インターンシップ」の推進 ・就農希望者を支援する「未来さが農業塾」の推進	・学科の専門性を生かした検定・資格取得のための指導（補習）や外部講師の実施。 ・就労意識を高めることを目的としたプロフェッショナルインターンシップの実施。 ・生徒の「未来さが農業塾」への入塾促進と具体的な就農計画の作成指導の充実。 ・マイスター制度を利用した専門技術指導の実施。	B	・外部講師を含めた校外との連携事業は年間30回実施しており、専門性を高める教育活動が実施できた。また、「未来さが農業塾」では、新たに3名を加え意欲的に活動できたが、就農ビジョン計画が不十分である。 ・インターンシップで勤労だけでなく授業で学べない専門知識と技術を学習することができた。	・「未来さが農業塾」入塾募集を保護者に対して詳しく説明するため、入学時点で取り組み始める。また、3年間を通した研修内容も新たに見直す必要があり、次年度の取組みとする。

⑤　生徒会活動や農業クラブ活動、部活動やボランティア活動の活性化

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 （左記の理由）	具体的な改善策
教育活動	●心の教育	生徒会・農業クラブ活動を通して地域に貢献しているか。 環境に配慮した取り組みがなされているか。 コミュニケーションは「挨拶から」を実践できているか。 生徒主体の取り組みができたか。	・生徒の自発的な地域社会貢献活動の推進とタイムリーな情報発信 ・エコハイスクールに向けた「ゴミゼロ運動」やゴミ分別による「資源リサイクル」活動の推進 ・販売会など日頃の学習成果を試す場を活用したマナーアップの推進 ・さわやかな挨拶、相手を思いやる行動の実践 ・社会組織の役割を理解させ、誰もが役割を担っていることを実感する。	・18歳選挙権について関係する行事ごとに考える場面を作り上げることでどのような意義があるかその都度考えさせる。 ・各学科専門性を活かした農業クラブ活動を強化する。全生徒が関わる行事を企画する。 ・職員の意識を高めるため、農業部会等の情報交換会の回数を増やす。 ・JRC部、生徒会、農業クラブを中心に生徒へのボランティア活動の斡旋を行う。 ・教師主導ではなく、生徒会等での自発的な活動が行われるように支援する。	B	・生徒の主体的な企画・運営により、体育祭やクラスマッチなどの体育的行事をはじめ、その他生徒会行事などを行うことができた。 ・よりよい学校生活のために、生徒自ら考え、行動することができた。 ・準備不足等もあり、ミスや不手際などで生徒や職員が困惑してしまうこともあった。 ・保護者の協力を得ながら、災害ボランティア参加者を募ったことで、ボランティア参加生徒数が昨年より増え、一生懸命に活動する姿を見ることができた（福岡朝倉）	・職員、生徒ともによりよい学校にするという意識を持ち、今年度の反省を次年度に活かす。 ・計画的に行事運営の準備をし、余裕のある運営ができるように考慮する。 ・生徒の主体性のある活動、行事運営になるよう楽しむときは運営側も楽しむ。厳粛な空気をつくるときは運営する生徒から真剣さが伝わるようなメリハリのある活動ができるように担当職員として生徒への指導法を実践する。
	●いじめの問題への対応	思春期の悩みの向き合い方を指導できたか。 いじめ問題への取り組みを2回以上を実施したか。 生徒の動向の変化を観察できたか。	・思春期の悩みとの向き合い方を指導助言することでいじめや不登校などを未然に防止する。 ・全校生徒、職員のいじめに対する意識を高める。 ・生徒に対する情報交換を1日1回以上実施する。	・生徒指導による早い段階での生徒指導（新入生対象講話、PTA総会でのSNSの利用についての保護者への協力等） ・職員間の情報交換による問題行動の早期発見。 ・いじめ防止標語募集（年2回）の実施による生徒への意識付け。 ・保護者との情報交換（面談）の実施。	B	・いじめ対策による基本方針として相手が嫌な気持ちや不快に感じる行為については、いじめであるとの認識を持つように生徒には指導した。 ・その結果いじめではないが、友人関係をめぐるトラブルで相談に来る生徒も出てきた。 ・対象生徒に対しては、スクールカウンセラーへの相談や助言を受けることで回避できた。 ・いじめ防止啓発活動（標語）を計画どおり実施することができた。	・弱いものをいじめることは人間として絶対に許されない」との強い認識を持たせる。 ・学校行事においても時間を設けていじめ防止に取り組む。 ・生徒の悩みを十分に受け止められる環境づくりを行い、必要に応じて関係機関と連携する。 ・家庭・学校・地域など全ての関係者がそれぞれの役割を果たし、一体となっていじめ防止に取り組む。

本年度の重点目標に含まれない共通評価項目

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 （左記の理由）	具体的な改善策

4　本年度のまとめ　・　次年度の取組

今年度は、学業においても、課外活動や日常生活においても一つ上を目指すことを目標に取り組んできた。各領域で、職員も生徒も熱心に取組んだことで成果を上げるとこができた。中でも進路実現において12年連続100%を達成することができた。また、教育振興会（保護者）と協力して、福岡県の被災地の農業ボランティアを企画することができ、生徒たちの生き生きとした姿を保護者や被災地の方に見ていただくことができた。

その一方で、農業教育の目玉であるプロジェクト学習では顕著な実績を残すことができず、厳しい評価となっている。しかしながら、各学科とも課題研究などの活動では専門教科を生かした取組みがそれぞれで取り組まれており、全く何もしなかったという意味ではなく、農業クラブの発表会等で結果を残せなかったことによる。このことについては、学校評議員の方々からも指導助言をいただくことができたため、次年度は職員や生徒たちに啓発しながら研究活動推進に取り組んでいく。

さらに、学力向上とICT利活用についての課題も多く、現在、タブレットを活用した自主学習方法についても2年生を中心に検討しているところである。職員のスキルアップにも引き続き努めながら、生徒の基礎学力向上とこういった便利なツールを活用する力を身につけさせていきたい。

●は共通評価項目、○は独自評価項目